



ラトビア・ルーイエナ町との姉妹提携が縁になって、ラトビアとの距離がまた少し縮まることになりました。リガからウナさんが来町してきたのです。少なくとも1年間、町の国際交流員として活躍してくれることになりました。ラトビアのどんな風を運んでくれるでしょうか。

8月、ラトビア共和国から新たにJETプログラムの国際交流員(CIR)として来日しました。このプログラムでは、外国語指導助手(ALT)としてカナダから毎年英語指導助手が来町していますが、ラトビアからは初めての来町です。

文化専門学校を卒業後、リガ市内のラトビア大学語学センターで日本語初級の先生。日本語、日本文化に関心が高く、日本語の研究にも興味を持っているようです。

「けっぱる」「あずましくない」「あっぱくさい」「あつべ」「がおる」「なんも」など、1964(昭和39)年に発行されたという北海道の方言集を集めたコピーを手に、さっそく北海道弁の表現訳も勉強中。

「将来はラトビア大学語学センターで日本語を教えたい。ラトビア人にとって日本は遠い遠い国なので関心が薄いけれど、興味のある人に日本文化を紹介したい」。

日本に興味を持つようになったのは高校時代。小説家・谷崎潤一郎の代表的作品とされる「痴人の愛」

(ラトビア語の訳本の題名は「ナオミ」というようです)を読んだことがきっかけだったようです。

「『ナオミ』の中で描かれている日本の生活は、ラトビアの生活とぜんぜん違っていた。『愛している』ということについて、ラトビア人の感覚とまったく違うし、『恥ずかしい』という感覚が独特」と。耽美的で独特な作風の中に描かれた国への興味が大きく膨らんでいったようです。

お父さんのユリスさん(48)はギタリストとして活躍しています。その影響を受け、音楽高校に進みました。ギターが趣味だそうで、来日後さっそくガットギター(クラシックギター)を買ったそうです。

昨年7月、インデックスプログラムで東京、大阪、京都、和歌山に約3週間滞在しました。「日本はともきれいな国。ラトビア人にとって日本はとても遠い国だけれど、日本の文化をもっとラトビアに紹介したい。ラトビアの子供たちに日本に来るチャンスを広げてあげたい」と思っています。

小学生から高校生まで参加して行われる「歌と踊りの祭典」(リガ市内のダウガスタシアンで)



来町してさっそく町内の温泉を満喫しました(旭岳温泉)



ラトビア交流協会のみなさんと一緒に(旭岳ロープウェイ)



ウナさんが先生をしていたラトビア大学語学センター日本語クラスの生徒さん

ウナ・ヴォルコヴァさん/東川町国際交流員/役場地域活性課/☎82-2111(内線263)
ラトヴィア共和国リガ市出身、22歳。ラトビア大学アジア学部卒(日本、中国、アラビアの歴史、文化、文学専攻)、ラトビア文化専門学校卒(日本語専攻)。ラトビア大学語学センターで日本語基礎講座教師。総務省、外務省、文部科学省と(財)自治体国際化協会(東京)が共同で実施しているJETプログラム(語学指導等を行う外国青年招致事業)で8月に来日。当面1年間の予定で町の国際交流事業の手伝い、町内の幼児対象「めだかクラブ」、小学校低学年対象に英語、国際理解教育の指導に当たります。東川ラトビア交流協会の会員の方からの要望に応じてラトビア語教室なども開く予定。